

牛群検定通信 No64

◇ 生まれてくる子牛の雄と雌の性比が逆転！ ◇

近年、性選別精液の利用が本格的になり、平成26年度の牛群検定における集計では雄子牛と雌子牛の性比が逆転しました。

【1】 性選別精液とは？

性選別精液は、国産の場合90%以上の確率で雌牛を生産できる最新のテクノロジーです。より効率的に雌牛を生産できるので、牛群全体としては乳用後継牛の生産に余裕が出来ることになります。そこで、牛群の上位1/2の雌牛に性選別精液を利用して乳用後継牛を効率良く生産できれば、下位1/3の雌牛には和牛受精卵などを利用した肉用肥育素牛を生産することが可能になります。こういった取り組みは現在、畜産クラスター事業においても対象となっており、盛んに行われるようになりました。

【2】 雄子牛と雌子牛

双子以上の分娩を除いた、性別がはっきりしている平成22年から24年度に分娩した約229万頭を集計しました。雄雌の性比は従来は約52：48でしたが、平成26年度での集計は、都府県49：51、北海道50：50となりました。これは、通常精液やF1（和牛交雑種）生産も含めての集計ですので、性選別精液を中心に利用している農家の場合は、もっと雄子牛の比率が減っていると考えられます。

【3】 後継牛生産と肉用肥育素牛の生産の使い分け

さて、このように盛んに行われている後継牛生産と肉用肥育素牛の生産ですが、これらの使い分けは、遺伝的能力をもとにするのが最も良い方法です。例えば、検定成績表に表示されている「牛評（遺伝評価）」が6以上であれば、遺伝的に牛群の中で平均以上となる優秀な雌牛となりますから、性選別精液等利用するなど積極的に後継牛生産に利用すると良いでしょう。

また、「牛評（遺伝評価）」が4以下であれば、遺伝的には劣る雌牛ですから、和牛交雑種や和牛受精卵など肉用子牛生産に用いると良いでしょう。

【４】 繁殖の改善

効率よく雌雄の生み分けができたとしても、繁殖成績が改善されなければ本当の意味で効率良く子牛が生産出来ているとは言えません。繁殖成績を示す指標として、よく使われている分娩間隔では、平成２６年度の全国平均は４３５日です。当たり前ですが、これは経産牛１頭あたり４３５日間に１頭の子牛が生まれることを意味しています。分娩間隔が短縮するほど効率の良い子牛の生産といえるわけです。分娩間隔は延伸の傾向にあると言われていますが、４年前の分娩間隔は４３８日ですから、この４年間では３日間改善しています。みなさんの経営ではどうですか？検定成績表で確認してみてください。